

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月21日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720130

研究課題名（和文） 認知類型論からみた英語自動詞構文の特徴：エスキモー語、日本語との
対照を中心に研究課題名（英文） A Cognitive-Typological Approach to English Intransitive
Constructions Focusing on the Comparative Study among Eskimo, Japanese and English

研究代表者

田村 幸誠（TAMURA YUKISHIGE）

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：30397517

研究成果の概要（和文）：英語の自動詞様態構文は多くの理論的分析の鋳型となっている一方で、本研究では、その特徴が極めて英語の特殊性を帯びているものであると指摘した。具体的にいうと、英語では音を様態の一部として捉える傾向にあるが、同じような自動詞構文をもつ他の言語では音が様態としてはグループ化されないことを指摘するとともに意味地図を提案し、相対的に捉える方法（意味地図）を提案した。また、この移動現象に関わる問題として、特に、後半は移動との共起関係で重要な指示詞、及び受け身表現（自動詞）の分析を多く行い、国内外の学会で発表した。

研究成果の概要（英文）：In this research, I pointed out that certain theoretical generalizations of intransitive constructions that are often used as archetypes of typological analyses are wrongly based on characteristics uniquely observed in English: for instance, in English, sound-emission verbs can be realized in manner-motion construction, but those observed in other languages that show essentially the same construction type can not. To compensate for theoretical shortcomings, I proposed semantic maps that characteristics of English intransitive constructions can be captured in a relative way compared to those of other languages. In addition, in the latter half of this research, especially, I extended my analysis to the usage of demonstratives and passive constructions that are closely related to that of motion construction, and I made conference presentations on this topic at various places as shown below.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：認知類型論と英語構文

科研費の分科・細目：言語学、英語学

キーワード：音表出動詞、移動構文、様態動詞、自動詞、受動態、指示詞、エスキモー語
（ユピック）

1. 研究開始当初の背景

本研究は、科研の申請時点で提出していた拙論文において、英語の自動詞様態構文（特に音に関するもの）が一般的に思われているほど他の言語に観察されるものでなく、音と様態を区別しないのは英語の極めて個別的现象であると指摘したことから始まる。本研究の方向性は、その指摘をもとに英語の移動に関する様々な言語表現をエスキモー語、日本語と比較することで、その一般的な妥当性を洗い直そうとしたところにある。英語の特徴を類型論的に捉え直す際に、日本語に加え、エスキモー語という系統の全く異なる言語を用いることは非常に有用であると考えた。

また、移動表現との関係で、その方向を示す指示詞の分析は欠かせないと考えた。エスキモー語は世界の言語の中でも非常に複雑な指示詞の体系をもっており、この認知言語学的特徴もふまえて、英語構文を見直すことが出来れば、かなり視野の広い研究になると計画を立てた。

最後に、移動表現は多動性との関わりも指摘される。本研究で受動態の特徴も3つの言語との比較で洗い出せれば、英語だけでなく、エスキモー語、日本語の理論研究にも役立つと考えた。

2. 研究の目的

英語の自動詞や移動に関わる様々な意味的要因をエスキモー語や日本語のそれに対応する表現と比較し、その事態把握の仕方、及びコード化の仕方の違いを綿密に比べることで、従来の言語理論を構築する際に鋳型の役割を果たしてきた英語の特徴に疑問を呈することにある。特に、様態動詞の意味的分析には自動詞であるにも関わらず、使役構文としての研究が目立つが、そういった、二値的な分け方ではなく、相対的に「意味の度合い」を表現できる意味地図を提案することを目的とした。特に、エスキモー語の特徴を性格に捉えた、自動詞移動構文、受動態、指示詞の意味地図を提案することを大きな目標とした。

3. 研究の方法

エスキモー語母語話者、英語母語話者にたいする聞き取り調査を中心に調査を進めた。アラスカ州フェアバンクス中心に3度、あわせて一ヶ月半のフィールドワークを行った。言語記述の少ないエスキモー語に関しては、まず、一人のインフォーマントとゆっくり様々な現象について話し合うことから始め、

そこで得たデータと私の解釈を他のインフォーマントで試す形で作業を進めた。また、これまでの先行研究であるエスキモー語の記述文法も理解するようにつとめ、過解釈のないように最大限の注意を払った。英語、日本語に関しては一つの現象に関して、常に10人ほどのインフォーマントにあたるようにつとめた。もちろん、これまでの先行文献の講読を行い、どこに研究の独自性があるのかについて考察を繰り返した。

4. 研究成果

自動詞、移動構文の研究を進める上で、指示詞との関連性の重要性を特に認識し、その分析を後半多く行っている。また、英語教育への応用に関しても論文を執筆、研究発表を行った。研究発表は都合12本（海外査読付き5本（2012年7月分を含む）、国内7本。査読付き学術論文は2本（海外1本（現在印刷中）国内1本）。また関連する短いエッセイ4本を執筆、英語の辞書に関する書物の翻訳し、また、本研究の英語教育への応用に関する講演会などを行うことで専門外の人にも研究を理解していただけるよう努力した。

以下もう少し具体的に研究成果を述べる。まず、本研究申請時点ですでに刊行されたいた自動詞構文と音の関係の論文（本研究の一番基礎になった論文）がきっかけで、その研究を含んだ、あるいは発展させた、雑誌論文②、研究発表⑤、⑥、⑦、⑫を発表する機会を得た。論文③は、学会の意味地図に関するワークショップでこれまでの成果を発表し、それをまとめたものである。以上のまとめとして、これらの論文で示したことを統一的に記述する論文を執筆する必要があると考えられるが、本研究期間中にそこには至らなかった。また、研究当初に考えていたタイ語や中国語と行った孤立語への理論の応用も今後の課題として残った。

次に、指示詞の分析について述べる。上述したようにエスキモー語は世界で最も複雑な指示詞の体系を有している言語として知られる。この使用を認知言語学的にインフォーマント調査を軸に分析し、英語の特徴をそのマトリックスの中で示そうとした。雑誌論文①はその研究の成果である。研究発表④をきっかけに、それを発展させた内容をBerkeley Linguistic Society という言語学では査読が厳しいとされる学会に応募し、発表が認められた（研究発表③）。また、その内容は、国内の学会（関西言語学会）で招聘研究として呼んでいただけることにもつながった（研究発表②）。今後、指示詞と移動表現の相関関係をより精緻化していく必要がある。この点が現在の課題である。

また、移動と他動性の関係に着目した部分

であるが、これは、研究発表⑨、⑫をきっかけにすすめたもので、主に海外の認知言語学関係の学会で発表を行った（研究発表①及び⑧）。

今後の研究課題はこの3つのテーマを一つの図書に纏めあげることである。このことに継続して取り組んでいきたいと考えている。

その他の研究成果として研究当初予想外だったことにエスキモー語のフィールドワークに関するエッセイを書いたことにある（その他(1)）。本研究は英語の構文的特徴を可能な限り客観的に捉え直す、というところに主眼があり、その中で系統の全く異なるという点で、エスキモー語をこれまでの調査経験も含めて選んだ。その一方で、エスキモー語は危機言語であり、将来母語話者がいなくなるのが危惧されている。本研究での調査のやり取りの一部が一般の人に読んでもらえる機会を得られたことは大変嬉しいことであった。（エッセイは主に全国の中学校に配布される雑誌に掲載された）。

また、一般の人に研究の面白さ、英語の面白さを知っていただきたいという意図で下の「図書①翻訳」を訳した。原書は一般読者を対象としたもので、主に英語辞書の面白さについて書かれたものである。言語の研究は、どの言語を選ぼうとも、まずは語彙を一つ一つ確認していく作業から始まる。一見、大変そうと退屈そうであるが、その作業の面白さ、有意義を原書は非常に分かりやすくかつ面白く読者に伝えている。英語学の面白さをよりたくさんの人に知ってもらいたいという一心で原書を翻訳した。初版は5000部で、専門書の数十倍の方に実際読んでいただけたことは上記のことが少し現実になった可能性があると考えている。今後もエッセイや一般書の翻訳、あるいは講演会（その他(2)）などで言語学研究の裾野が広がるよう努めたいと思う。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

[雑誌論文] (計3件)

- ① Tamura, Yuki-Shige (2012, in press)
“Epistemicity and Referentiality:
Evidence from Central Alaskan Yup’ik,”
*The proceedings of The 38th annual
meeting of the Berkeley Linguistics
Society* (15pages). 査読有
- ② Tamura, Yuki-Shige and Miyagi
Sadamitsu (2010) “Bridging the Gap
between Grammar Instruction and
Cross-Cultural Communication: Some
Applications of Cognitive Linguistics to

- EFL Classroom,” 『認知言語学論考 No.5』
ひつじ書房, pp.245-277. 査読有
- ③ 田村幸誠 (2008) 「自動詞様態移動構文に
関する通言語的考察：意味地図の観点から」
『日本認知言語学会論文集 8』 pp.
641-644.

[学会発表] (計12件)

- ① Tamura, Yuki-Shige (2012/accepted)
“A Patient-Oriented View of Force
Dynamics and the Relationship
between Indirect Passives and
Causative Construction Revisited,”
the 4th UK-Cognitive Linguistics
Conference, at King’s College London,
2012年7月11日.
- ② 田村幸誠 (2012) 「指示機能にみられる
段階性とその類型論的含意:エスキモー
語と英語の対照分析から」 第37回関西
言語学会(招聘研究発表) 於 甲南女子
大学 2012年6月3日.
- ③ Tamura, Yuki-Shige (2012)
“Epistemicity and Referentiality:
Evidence from Central Alaskan
Yup’ik,” The 38th annual meeting of
the Berkeley Linguistics Society, at
UC Berkeley, California, 2012年2月9
日
- ④ 田村幸誠 (2011) 「指示機能とそのスキ
ーマ性について：英語とエスキモー語の
対照研究からみた認知類型論研究への含
意」 京都言語学コロキウム第8回年次大
会 於 京都大学 2011年8月27日.
- ⑤ 田村幸誠 (2010) 「移動動詞の類型論的特
徴について」形式語研究会 於 国立国語
研究所 2010年12月19日.
- ⑥ 田村幸誠 (2010) 「認知言語学からみた
異文化理解」札幌大学認知言語学セミナ
ー 於 札幌大学 2010年12月10日.
- ⑦ Sadamitsu, Miyagi and Yuki-Shige
Tamura (2010) “Grammar Instruction
that works along with Intercultural
Communication: Some Applications of
Cognitive Linguistics to EFL
Classroom,” the Fourth Linguistics
Conference of Free Linguistics Society,
at University of Sydney, 2010年10月7
日.
- ⑧ Tamura, Yuki-Shige (2010)
“A Patient-Oriented View of Force
Dynamics and the Relationship
between Indirect Passives and
Causative Construction,” 10th
Conceptual Structure, Discourse and
Language Conference, at University of
California San Diego, 2010年9月17日.
- ⑨ 田村幸誠 (2010) 「受益と使役の連続性

と曖昧性について：英語、日本語、ユピック語の対照分析を中心に」第23回 福岡認知言語学会 於 西南学院大学 2010年8月27日.

- ⑩ 田村幸誠 (2010) 「能格言語からみた対格言語に生じる受身と使役の曖昧性について：ユピック語、英語、日本語の対照分析を中心に」 京都言語学コロキウム 於 京都大学 2010年3月27日.
- ⑪ Tamura, Yuki-Shige, and Miyagi Sadamitsu (2009) "Bridging the Gap between Grammar Instruction and Intercultural Communication: Some Applications of Cognitive Linguistics to EFL Class," the 42nd Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics, at Newcastle University, 2009年9月10日.
- ⑫ 田村幸誠 (2009) 「認知類型論からみた日本語とユピック語の相互構文」第52回 中部日本・日本語学研究会 於 刈谷市産業振興センター 2009年5月16日.

〔図書〕(計1件)

- ① 翻訳 (単独) :
『そして、僕はOEDを読んだ』
原題：Reading the OED: One Man, One Year, 21,730 pages, by Ammon Shea, Penguin Books, 三省堂, 全304ページ.
2010年12月1日.

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

〔その他〕

- (1) エッセイ：『失われていくものと残した
いも』の：アラスカ・エスキモー』（4
回連載）『Teaching English Now:英
語教師のための情報誌』三省堂.
①「エスキモーそれともイヌイット？」(vol.
22/裏表紙)
②「this と that が30個！？」(vol. 21/
裏表紙)
③「ヘラジカの頭」(vol. 20/裏表紙)
④「異文化理解は面白い」(vol. 19/裏表紙)
- (2) 講演会：『異文化コミュニケーション論
の英語教育への展開』第28回札幌大学
教友会. 2011年8月6日.

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
田村 幸誠 (TAMURA YUKISHIGE)
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：30397517
- (2) 研究分担者
なし
- (3) 連携研究者
なし